

【資料】

総合看護実習（学内実習）の学生による 評価と今後の課題

宗 内 桂^{*}, 村 田 由 香^{*}, 篠 原 謙 太^{*}

【要 旨】

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の影響により、総合看護実習は一部の病院で実習の受け入れが中止となった。そのため、前年度に続いて2021年度も学内実習を実施し、その課題を明らかにした。

学内実習は臨地実習と同じ実習目標で実施した。複数対象者に必要な看護については、4人の患者を対象に多重課題を設定し、1グループ4人の学生が、ペアで2人の患者を受け持ち、看護を実践した。また、チームの一員として連携・協働するための看護の役割についてはLIVE配信のオンライン臨床講義によって学習した。アンケートは学内実習を経験した学生のうち45人から回答を得た。

その結果、学生は、多重課題への対応、臨床講義の満足度について、概ね肯定的な回答をしていた。一方で「実習記録に活かさない内容だった」「夜間実習のイメージが難しく課題として残った」という意見もあった。学内実習内容の課題から、今後さらに実習方法を検討していく必要がある。

【キーワード】 総合看護実習、学内実習、学生評価

I. はじめに

2008年の保健師助産師看護師学校養成所の指定規則改正から、看護師課程は統合分野・統合科目の新設により、統合分野の実習では、基礎・専門科目で履修した内容を臨床で活用するため、チーム医療、看護管理、医療安全等を学ぶとともに、複数患者の受持ちや一勤務帯の実習も含めた実習とすると明示された（厚生労働省、2007）。また、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」で取りまとめられた「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」では、「臨地実習は看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法のひとつである。看護系人材として求められる基本的な資質と能力を常に意識しながら多様な場、多様な人が対象となる実習に臨む。その中で知識・技術の統合を図り、看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに、看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付ける」（文部科学省、2017, p.9）と述べられている。

A大学における統合分野の実習は、「総合看護実習」として4年次に位置づけている。総合看護実習の目的は、「医療施設・地域等の看護サービスの場で、看護職の一員であることの責務を自覚しながら、ス

タッフの連携・協働によるケア実践に参加し、リーダーシップやマネジメントの視点でチーム医療について理解すること、さらに、教育理念であるヒューマンケアリングの実践家としての基礎的能力を養うこと」としている。そして、学生の主体性を育むため、実習科目として設定している実習目標の他に、各自が「自己の実習目標」を設定し、事前実習計画を立案している。そして、実習施設の看護管理者や臨床指導者と計画内容を調整しながら実習に取り組む方法を取り入れている。

しかしながら、2020年より長期化する新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、一部の実習施設において実習受け入れが中止となった。文部科学省（2020）は厚生労働省と共に、2020年2月と6月に、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」を発出し、実習施設の確保が困難である場合に、実情を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等の実施によって、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないと周知した（p.3, p.10）。

A大学においても、2020年に引き続き、一部の施設で臨地実習の受け入れが中止となり、2021年度の総合看護実習は、履修生164人のうち73人（44.5%）が学内実習に変更となり、16人（9.7%）が臨地実

* 日本赤十字広島看護大学

習と学内実習を組み合わせた方法となった。実習後に実施した学生の実習評価アンケート結果から、学内実習の課題が明らかになったため報告する。

Ⅱ. 総合看護実習の概要

1. 実習の位置づけとねらい

本実習は、4年次の7月～10月の間に1クール2週間で実施される。1・2年次の「基礎看護学Ⅰ・Ⅱ」と「成人看護学Ⅰ」の実習では、看護実践の展開の基礎・基本となる援助方法を学び、3年次後期から4年次前期にかけての「母性・小児・成人・老年・精神・地域」領域の看護学実習では、それを発展させ対象者の特性および生活する場に応じた看護援助の方法を学習した。

各領域の看護学実習では、1人の対象者を受け持ち、援助的人間関係を作りながら問題解決思考を適用して看護ケアを実践するという方法を中心に学習を行っている。その際には、対象者の健康障害だけでなく、その人の生活の場とライフサイクルを含めた全体像を捉え、チームアプローチの重要性を考慮したケアを目指している。それゆえ、対象をとりまく環境を保健医療福祉という総合的な視野で捉えることや、臨床のスタッフメンバーと建設的な人間関係を作ることも必然的に要求される。

しかし、実際の学生の経験や能力では、受け持ち対象者の看護に重点が置かれ、受け持ち対象者以外に関わる医療チームや組織間の協働などの側面から看護を見据える体験が少ない。実際の臨床の場では、チームの中で看護が展開されており、学生も、就職後は組織の一員としての倫理観をもち、責務を自覚し、メンバーシップを発揮することが要求される。そこで、総合看護実習は、これまでの実習を統合し、保健医療福祉チームで行われるチーム医療について学ぶこと、ヒューマンケアリングの視点で看護活動を検討し、今後、組織内で役割を果たすメンバーとしての立場から、自己の取り組み課題を明示することを実習目的・目標としている。

2. 実習目的・目標

2021年度総合看護実習の実習目的および実習目標を表1に示す。また、実習目標に対する学習評価基準表（ルーブリック）の一部（到達レベルS）を表2に示す。

3. 実習方法

臨地実習の場合の実習方法は、次のとおりである。

1) 実習日程

本実習期間は、1クール2週間とし、3クールに分かれて実施する。最終日は学内にてまとめおよび教員との個人面接を行う。

表1 2021年度総合看護実習の目的および目標

1. 実習目的
医療施設・地域等の看護サービスの場で、看護職の一員であることの責務を自覚しながら、スタッフの連携・協働によるケア実践に参加し、リーダーシップやマネジメントの視点でチーム医療について理解する。さらに、ヒューマンケアリングの実践家としての基礎的能力を養う。
2. 実習目標
1) 看護職の責務を自覚し、主体的に倫理的行動をとることができる。 (1) 自己の実習目標達成に向けて主体的に行動する。 (2) 実習施設の倫理綱領を理解し、組織の一員として指針に則った行動をとり、医療現場の倫理的課題に気が付く。
2) 看護の質向上・医療安全・継続看護の視点を踏まえ、複数対象者に必要な看護について優先順位を決定し、実践することができる。 (1) 複数対象者の夜間を含めた療養生活を理解し、優先順位を判断して看護上の問題を特定し、必要な看護を述べる。 (2) 看護の質向上・医療安全・継続看護の視点を持ち、優先順位を踏まえて複数対象者の看護をスタッフと共に実践する。
3) 保健医療福祉チームの一員として連携・協働するための看護の役割を述べる。 (1) チーム医療推進に向けた組織的取り組みの現状と看護の役割を述べる。 (2) チーム医療に必要な多職種と行う報告・連絡・相談の場に参加し、専門職として他者を尊重したコミュニケーションをとる。
4) 自己の着目した看護活動をヒューマンケアリングの視点で検討し、組織の一員としての自己の取り組み課題を明示することができる。 (1) 自己の着目した看護活動の現状を、組織全体のマネジメントの視点で分析する。 (2) 自己の着目した看護活動が、ヒューマンケアリングの実現とどのように関係しているかを述べ、自己の取り組み課題を明示することができる。

表2 2021年度総合看護実習 学習評価基準表（ルーブリック）一部抜粋

実習目標	学習評価基準 到達レベル S
1. 看護職の責務を自覚し、主体的に倫理的行動をとることができる。	1) 自己の実習目標達成に向けて主体的に行動する。 自己の実習目標や日々の実習目標達成に向けて、主体的に立案した事前実習計画を基に、周囲に働きかけ、日々PDCAサイクルを実践し、すべての目標を達成することができる。
	配点 10
	2) 実習施設の倫理綱領を理解し、組織の一員として指針に則った行動をとり、医療現場の倫理的課題に気が付き、組織の視点で改善策を述べるができる。 実習施設の倫理綱領を理解し、組織の一員として指針に則った行動をとり、医療現場における倫理的課題に気が付き、組織の視点で改善策を述べるができる。
2. 看護の質向上・医療安全・継続看護の視点を踏まえ、複数対象者に必要な看護について優先順位を決定し、実践することができる。	1) 複数対象者の夜間を含めた療養生活を理解し、優先順位を判断して看護上の問題を特定し、必要な看護を述べる。 複数対象者の夜間を含めた療養生活を理解し、健康状態をアセスメントした結果から、根拠に基づき優先順位を判断して看護上の問題を特定し、複数の問題に対して必要な看護を述べるができる。
	配点 10
	2) 看護の質向上・医療安全・継続看護の視点をもち、優先順位を踏まえて複数対象者の看護をスタッフと共に実践する。 看護の質・医療安全・継続看護の視点をもち、優先順位を踏まえて複数対象者の看護をスタッフと共に実践し、自己の優先順位の判断やタイムマネジメントを評価できる。
3. 保健医療福祉チームの一員として連携・協働するための看護の役割を述べるができる。	1) チーム医療推進に向けた組織的取り組みの現状と看護の役割を述べる。 チーム医療推進に向けた組織的取り組みについて、リーダーシップ、メンバーシップに加え、地域連携の視点で現状と看護の役割を述べることができる。
	配点 10
	2) チーム医療に必要な多職種と行う報告・連絡・相談の場に参加し、専門職として他者を尊重したコミュニケーションをとる。 チーム医療に必要な報告・連絡・相談を、根拠・優先順位・タイミングをすべて考え関連する看護職または他職種に対して実践することができる。
4. 自己の着目した看護活動をヒューマンケアリングの視点で検討し、組織の一員としての自己の取り組み課題を明示することができる。	1) 自己の着目した看護活動の現状を、組織全体のマネジメントの視点で検討する。 自己の着目した看護活動の現状を、組織全体のマネジメントの視点で分析した結果を受けて、組織理念実現との関係を述べるができる。
	配点 10
	2) 自己の着目した看護活動とヒューマンケアリングの実現との関係を述べ、自己の取り組み課題を明示する。 自己の着目した看護活動において、ヒューマンケアリングの実現とどのように関係しているかを述べ、自己の取り組み課題に対する行動計画を具体的に述べることができる。
	配点 10

2) 実習施設

実習施設は、県内外の14施設で、学生の希望を取り入れて配置する。

3) 実習の流れ

本実習の流れを図1に示す。本実習では、学生の主体的行動を第一に、学生が自ら2週間の実習計画を立案し、実習開始前に担当教員を通して実習施設へ提出する。実習開始後は、学生が実習施設の看護管理者や臨床指導者と交渉して実習を進める。教員

は、実習1週目に1日ラウンドし、実習目標達成に向けて学生からの相談を受け、実習記録や最終報告会への助言等を行う。2週目は実習報告会まで教員のラウンドはなく、適宜メールなどで相談を受ける。

4. 実習内容

総合看護実習における主な実習内容は次のとおりである。

1) 学習評価基準表（ルーブリック）の活用

日々、総合看護実習 学習評価基準表（ルーブリック

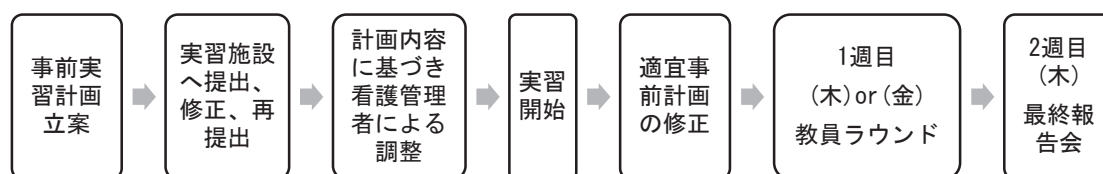


図1 2021年度総合看護実習の流れ

ク)を活用し、実習目標の到達レベルを確認しながら学習する。

2) 事前実習計画の作成・実習計画の調整

学生は実習開始2か月前から、2週間の実習計画を立案する。最初に、総合看護実習で達成したい「自己の実習目標」を設定する。実習計画の内容は、「複数患者受け持ち実習(2～3日)」、「看護管理者実習(半日～1日)」、「夜間実習(1日)」を必須としている。その他は、「入退院支援における地域連携」、「医療安全におけるチーム活動」、「専門看護師や認定看護師の活動」など、「自己の実習目標」を踏まえながら、学生が個々に着目した看護活動を複数取り挙げ、それぞれ学ぶ目的を明記して「事前実習計画」を作成する。

実習初日に実習施設の看護管理者や実習指導者から施設および看護チームのオリエンテーションを受け、事前に立案した実習計画を実施できるように情報収集して計画を具体化する。

3) 複数患者受け持ち実習

看護チームの一員として、スタッフと共に学生が複数患者(2～3名)を2～3日継続して受け持ち、ケアの優先順位を考えスケジュールを調整し、必要な看護をスタッフと一緒に実践する。可能な範囲で複数対象者の看護必要度の評価を体験する。

4) 看護管理者実習

看護管理者の役割やリーダーシップの考え方、組織の一員としてのメンバーシップのあり方について理解するために、看護師長または看護係長・看護主任の行う業務内容の説明を受け、半日～1日一緒に行動する。

5) 多職種連携の理解

事前実習計画に挙げたいくつかの看護活動について、看護職間および他職種との協働場面に参加し、チーム医療の現場を体験する。

6) 診療の補助への参加

十分な倫理的配慮と同意のもと、治療・検査・処置等を幅広く見学し、診療の補助に参加、看護を実践する。

7) 夜間実習

夜間の入院患者の状況や、24時間を通した看護のあり方、夜勤帯のスタッフの業務や安全管理などを、実際の看護活動を通して学ぶために、夜間実習を体験する。

8) 看護活動における組織マネジメント理解

事前実習計画に挙げた看護活動について、医療現場で行われている実際の活動を体験し、最も学びを深めたい看護活動を焦点化し、「自己の着目した看護活動」として現状を組織全体のマネジメントの視点で分析する。分析を通して、自己の着目した看護活動とヒューマンケアリングの実現との関係を述べ、組織の一員としての自己の取り組み課題を明示する。

9) 実習報告会

自己の着目した看護活動をヒューマンケアリングの視点で検討し、組織の一員としての自己の取り組み課題について、文献や助言を用いて考察した内容をグループメンバーとディスカッションし、看護管理者や教員からの助言を踏まえて自己の考えを深める。

Ⅲ. 学内実習の概要

1. 学内実習対象学生

2021年度総合看護実習履修生164人のうち、学内実習に変更となった学生は89人(54.2%)であった。内訳として、全日程(2週間)すべて学内となった学生は73人(44.5%)、臨地と学内を組み合わせた方法となった学生は16人(9.7%)であった。

2. 学内実習日程

臨地実習と同様に実習期間は2週間とし、学内実習になった学生は全員3クール目の時期に実施した。学内実習のスケジュールを表3に示す。

学生89人をA、Bに分けて、1グループに学生4人を配置した。そのうち、臨地実習と学内実習を組み合わせた方法となった学生16人(4グループ)は、2グループに分かれて1週間ずつで入れ替わり、両方の実習を経験した。

表3 学内実習スケジュール

学生 グループ	1 週目					2 週目					
	月	火	水	木	金	月	火	水		木	金
								am	pm		
A-1	オリエンテーション・複数患者受け持ち選定準備・自己学習	自己学習	複数患者の看護一日目 (午前と午後で患者役交代)	臨床講義・自己学習	複数患者の看護二日目 (午前と午後で患者役交代)	臨床講義・倫理カンファレンス・自己学習	自己学習	複数患者の看護三日目 (一時間半で患者役交代)	自己学習	自己学習・実習報告会・個人面接	自己学習・個人面接
A-2											
A-3											
A-4											
A-5											
A-6											
A-7											
A-8											
A-9											
A-10											
B-1		複数患者の看護一日目 (午前と午後で患者役交代)	臨床講義・自己学習	臨床講義・自己学習	自己学習		複数患者の看護二日目 (午前と午後で患者役交代)	自己学習	複数患者の看護三日目 (一時間半で患者役交代)		
B-2											
B-3											
B-4											
B-5											
B-6											
B-7											
B-8											
B-9											
B-10											
B-11											
B-12											

3. 学内実習方法および内容

学内実習も臨地実習と同等の学びを確保するために実習目的・目標を変更せず、実習目標を達成できるように実習方法および内容を次のとおり設定した。

1) 倫理カンファレンス

実習目標1.「看護職の責務を自覚し、主体的に倫理的行動をとることができる。」の達成に向けて、倫理カンファレンスを実施した。

グループ共通事例として、「コロナ禍における面会制限について」というテーマを取り上げ、「4ステップモデルによる問題解決用紙」を用いて分析し、組織的視点を踏まえて改善策を考えた。学生が司会進行を務め、教員はファシリテーターとして適宜助言を行った。

2) 複数患者受け持ち実習

実習目標2.「看護の質向上・医療安全・継続看護の視点を踏まえ、複数対象者に必要な看護について優先順位を決定し、実践することができる。」の達成に向けて、患者4人の事例を設定した。

(1) 複数患者受け持ち方法

学生4人を1チームとし、ペアで2人の患者を3

日間受け持った。患者を受け持つ学生と患者役の学生は一日の中で交代するが、患者の時間設定は共通とし、1日目：8時30分～15時30分、2日目：13時～15時30分、3日目：19時～20時の時間帯に患者を受け持つと仮定して看護を実践した。

事例では、急変や転倒事故といった緊急時の場面を設定し、学生4人で緊急時の多重課題に対して優先順位を考え看護を実践することで、優先順位の判断やチーム連携を学ぶ機会とした。

(2) 患者設定

患者設定を表4および緊急時の設定を表5に示す。患者役は、奇数グループの学生4人と偶数グループの学生4人が交代で担った。患者役になる際は、自己の受け持ち患者とは異なる患者を担当することとし、患者の症状や発達段階の特徴を事前に学習して演じられるようにした。

表4 患者設定

患 者	入院時主訴・診断・既往	3 日間の設定	
患者 A 60歳代 会社員	労作時胸部圧迫感 高血圧	1 日目	入院当日
		2 日目	心臓カテーテル検査当日
		3 日目	心臓カテーテル検査翌日
患者 B 20歳代 会社員	胸痛・呼吸困難 自然気胸	1 日目	入院 2 日目
		2 日目	入院 3 日目
		3 日目	入院 4 日目
患者 C 80歳代	めまい、食欲不振 貧血、腰痛	1 日目	入院 2 日目 上部内視鏡検査当日
		2 日目	上部内視鏡検査翌日
		3 日目	上部内視鏡検査後 2 日目
患者 D 80歳代	下肢疼痛 閉塞性動脈硬化症 高血圧	1 日目	入院 9 日目 PTA 後 7 日目
		2 日目	PTA 後 8 日目
		3 日目	PTA 後 9 日目

表5 緊急時の設定

グループ	患者 A	患者 B	患者 C	患者 D
偶数 G	1 日目 胸痛発作出現	3 日目 呼吸困難出現	1 日目 検査前吐血	—
奇数 G	—	3 日目 呼吸困難出現	1 日目 止血処置後再出血	2 日目 転倒

(3) 電子カルテによる情報収集

学内実習用に電子カルテを作成し、ノートパソコンを用いて実習時間内に情報収集ができるようにした。電子カルテの一部を図2, 3に示す。

図2の病棟マップを開き、受け持ち患者氏名をクリックすると患者情報を閲覧できるようにした。カルテには日替わりでパスワードを設定し、受け持ち日の情報のみ閲覧できるようにした。

3) オンライン臨床講義

実習目標3.「保健医療福祉チームの一員として連携・協働するための看護の役割を述べることで

きる。」および、実習目標4.「自己の着目した看護活動をヒューマンケアリングの視点で検討し、組織の一員としての自己の取り組み課題を明示することができる。」の達成に向けて、オンラインでの臨床講義を設定した。

臨床講義は、実習予定であった施設の看護部の協力を得て、実習目標に関連する講義をZOOMでLIVE配信した。臨床講義の内容を表6に示す。

学生は、講義の中から一つの看護活動に着目し、講義内容と各病院のホームページを参考にして組織マネジメントについて分析した。臨床講義の内容が

デイルーム	面談室	石川啓二				堂垣昭	飯沼まり			笹川 俊三
				池垣夏理	大巻 洋	藤木剛志			鹿島 光	
		313			312			311		

機材庫	ミキシングルーム	スタッフステーション	観察室 大木 恵一 南 良子	WC	汚物室	洗濯室	ゴミ置き	機材庫
	処置室					シャワー	リネン	車いす ストレッチャー

301		302		303		305		306		307	308
	秋山 心	渡川菜穂	斎藤美香	三輪敏文	池谷卓	佐伯一星	大野洋平	金城 美幸		相良妙子	荒木田誠
藤木 豊		太内たえ	水本星彦	佐々木敦	鈴木順平		龍田 徹	岡 直美	三木やすみ		

図2 電子カルテ例「病棟マップ」(患者名はすべて事例用の仮名とする)

すべての Acces... << 患者基本情報 経過表

検索... レポート

患者基本情報

- 指示簿
- 経過表 (9月28日～)
- 医師記録 (9月28日～)
- 看護記録 (9月28日～)
- 血液検査
- 生理検査

呼吸器内科 ID:sougoub 名前: 藤木 響 (フジキ ヒビキ) 24 歳

生年月日 1997年7月5日

入院日 2021年9月27日 主治医 綾野 受け持ち看護師 松岡

身長(cm)	178	
体重(kg)	63.4	
診断名	左自然気胸	
キーパーソン	母	
血液型	B (Rh+)	
既往歴		
現病歴	勤務中に突然、胸痛と呼吸困難が出現し救急搬送され、気胸の治療のために入院となった。現在、胸腔ドレーン挿入部に疼痛があるが、身の回りのことは自己で行っている。	
治療経過	入院当日に胸腔ドレーン挿入し経過観察中。	
嗜好品	コーヒー	
喫煙	喫煙歴なし	
性格		
職業	会社員	
食事	自立 自炊具などの装着可 標準的時間内に食べ終える	
車いすからベッドへの移動	自立 フレーキ、フットレストの操作も含む(非行自立も含む)	
整容	自立(洗面、整髪、歯磨き、髭剃り)	

図3 電子カルテ例「患者基本情報」(患者名はすべて事例用の仮名とする)

表6 臨床講義内容

日程	講師	内容
令和3年9月29日(水) 13:30-14:30 (Bグループのみ) (Aグループは9/30録画視聴)	A病院 地域連携室看護師長	地域包括ケア時代の多職種連携
2021年9月30日(木) 10:00-11:30	B病院 看護師長	看護師長の役割
2021年10月4日(月) 9:30-10:30	C病院 看護部長	コロナ禍における病院の対応 ー人員配置とスタッフのストレスマネジメントー
2021年10月4日(月) 10:40-12:00	C病院 感染管理認定看護師	コロナ病棟の管理運営と感染看護の実際
2021年10月4日(月) 13:00-14:00	D病院 看護部長	新人看護師の成長支援の在り方

限られていたため、一部の学生は、事前実習計画に挙げていた看護活動とは異なる活動に着目して分析する必要があった。

IV. 学生による学内実習の評価

1. 対象

実習終了後の実習評価アンケートに回答した73人(44.5%)のうち、同意を得られた68人(41.4%)の中から、学内実習を経験した45人(27.4%)を対象とした。

2. 倫理的配慮

倫理的配慮として、アンケートへの協力は自由意思であり、無記名のため個人は特定されないこと、実習の評価や成績に一切影響しないことを口頭で説明した。結果の公表に対して、「同意しない」と回答したデータおよび無回答のデータは除外した。なお、本報告において開示すべき利益相反関係にある企業・組織および団体等はない。

3. 結果

1) 倫理カンファレンス

倫理カンファレンスの満足度は、「非常に満足した」「満足した」「どちらでもない」「あまり満足しなかった」「満足しなかった」の5段階で回答を得た。

「非常に満足した」「満足した」は28人(62.2%),「どちらでもない」は8人(17.8%),「あまり満足しなかった」「満足しなかった」は4人(8.9%),無回答は5人(11.1%)だった。

満足した点は、「先生がファシリテーターとして加わってくださり、実際の対応方法やどのようにしたら倫理原則を守れるかという視点を多く学べた」、「医療現場での倫理的課題についてグループや先生と話すことで組織的視点の改善点を考えることができた」などがあった。改善点は、「提示された内容で不明瞭な点があったのと、自分たちで倫理的問題を見つけるのではなく、教員の意図する倫理的問題を探す作業になっていた」という意見があった。

2) 複数患者受け持ち実習

4人の複数患者への看護に関する5つの評価項目に対しては、「強くそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「思わない」「全く思わない」の5段階で回答を得た(表7)。

3) オンライン臨床講義

臨床講義の満足度は、「非常に満足した」「満足した」「どちらでもない」「あまり満足しなかった」「満足しなかった」の5段階で回答を得た。

「非常に満足した」「満足した」が、38人(84.4%)であった。「どちらでもない」は4人(8.9%),「あまり満足しなかった」「満足しなかった」は、3人(6.7%)であった。

満足した点は、「実際の感染対策や新人看護教育が深く学べた」、「実際に自分が看護師として働くようになった時のことをイメージしやすかった」などであった。改善点は、講義内容と自己の着目した看護活動について、マネジメント要素を分析する実習

記録との関連がわかりにくかったことが挙げられた。

4) 学内実習全体への意見(自由記述)

学内実習全体への意見として、効果的であった点は、「学内実習であっても目標を達成できるよう充実した内容だった」、「自己学習日の設定により、余裕をもって学習に取り組み、丁寧に予習や振り返りができた」などがあった。

一方、改善点として、「夜間実習のイメージが難しく課題として残った」、「学生が患者でリアリティに欠けた」、「他職種との連携の実践ができない」、「自己学習より複数患者への看護実践の時間を増やして欲しい」、「臨地実習の学生との学びの差を感じた」などの意見があった。

V. 今後の課題と展望

1. 臨場感のある実習内容の検討

学内実習の複数患者を対象にした看護および臨床講義とも7～8割以上の肯定的回答を得た。しかしながら、「夜間実習のイメージが難しく課題として残った」、「学生が患者でリアリティに欠けた」というように、臨場感のある実習内容に課題が残った。特に、夜間実習の設定について、学生が就寝前の患者の療養生活をイメージできるように、日勤からの申し送りを設定し、学生自身が就寝前に必要な看護を考えられるように助言する必要がある。さらに、日々のカンファレンスでも、夜間におけるチーム連携の視点で振り返りをするなど、夜間実習の方法を検討していく。

また、患者役がリアリティに欠けていた点について、高橋ら(2022)も学内実習は、学生同士で行ったことでの臨場感の欠如がある(p.77)と述べているように、臨地での経験が少ない学生が患者役を担うことには限界があり、臨場感を持たせることができずに、学びの差として評価されたことも危惧される。A大学では模擬患者の養成に取り組んでおり、多くの演習で協力を得てリアリティのある患者を演

表7 複数患者への看護に対する学生評価 (n=45)

評価項目	「強くそう思う」/ 「そう思う」	どちらでもない	「思わない」/ 「全く思わない」
1. 事例は現実の看護場面をイメージできる内容だった	38人(84.4%)	5人(11.1%)	2人(4.5%)
2. 事例の流れは順序良く整理されていた	35人(77.7%)	7人(15.6%)	3人(6.7%)
3. これまで学んだ知識と関連のある展開だった	43人(95.6%)	1人(2.2%)	1人(2.2%)
4. 難しすぎることも優しすぎることもない展開だった	37人(82.2%)	7人(15.6%)	1人(2.2%)
5. 実際にやってみる意義がよく伝わる展開だった	35人(77.8%)	6人(13.3%)	4人(8.9%)

じて頂いているが、模擬患者の大半が高齢者であり、感染防止のため今回は活用することができなかった。一方、臨床の看護師に患者や家族を演じてもらったり、カンファレンスに参加してもらったりすることで、リアリティを持たせることや看護師とのコミュニケーションをとる機会に繋がったという報告もある（園田ら、2022）。A大学では、学内演習などに臨床看護師の協力を得る赤十字看護教育サポーター（Red Cross Nursing Education Supporter, 以下、レクネス）制度を導入しており、学内実習においてもレクネスを活用するなど、実習目標達成に向けた臨場感のある方法を検討する必要がある。また、「紙面上の患者を想像するより動画を視聴する方が学生の理解が深まる」（大森, 2022, p.162）といった報告もあることから、今後は、学生の臨地実習の経験値に合わせて、映像による患者情報の提供も検討していく。

倫理カンファレンスの満足度は6割にとどまった。要因として、「医療現場の倫理的課題に気が付く。」という実習目標に対して、教員が設定した事例を用いてカンファレンスを行ったことが挙げられる。通常、臨地実習では、学生は受け持ち患者の看護を通して倫理的課題に気付くように取り組むが、学内実習では、「教員の意図する倫理問題を探す作業になっていた」という意見からも、自ら倫理的課題に気が付いたとは言えないと感じていたことが考えられる。今回、複数患者の事例は、倫理的課題の設定を意識せずに作成したため、今後は、受け持ち患者の看護を通して倫理的課題に気づけるように患者設定（カルテ情報）を見直す必要がある。

臨床講義はオンラインでの実施であり、その場で質疑応答が可能であったため、臨地の状況が理解できたと推察される。しかしながら、講義内容に限りがあったことで、学生が事前実習計画に挙げていた看護活動をすべて学ぶことはできなかったのが現状である。そのため、着目した看護活動に対してマネジメント要素を分析する実習記録に困難を感じる学生もいた。今後は、臨床講義の内容が決定したタイミングで、学生に対して着目する看護活動を見直すように促し、改めて事前学習に取り組めるように支援する。また、学生は、臨地の看護活動について、初めて組織マネジメントの視点で分析するため、理解に繋げるための質問を事前に考えるように促すと同時に、看護管理者と講義の目的や内容をより詳細に共有する必要がある。

2. 学内実習方法の検討

学内実習に必要な教員数や学内感染防止対策によ

る実習室配置の都合上、実習日が限られたことは、学内実習の運営上の限界である。自己学習内容も含め、学内実習方法を検討していく必要がある。

VI. おわりに

新型コロナウイルス感染症は終息しておらず、今後も感染拡大に伴い、再び臨地実習が困難な状況になることは十分に予測される。代替実習においても学生の教育の質を担保できるよう、実習目標達成可能な学内実習の方法や内容を継続して検討する必要がある。

なお、本研究の一部を第23回日本赤十字看護学会学術集会にて報告した。

謝 辞

大変ご多忙の中、急な依頼にも関わらず、快く臨床講義をお引き受けいただきました実習施設の看護部の皆様に心から感謝申し上げます。また、実習評価アンケートにご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 厚生労働省（2007）. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> [2022/11/3閲覧]
- 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会(2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf [2022/11/6閲覧]
- 文部科学省（2020）. 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について
https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf [2022/12/19閲覧]
- 大森美保（2022）. コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討. 帝京科学大学紀要, 18, 157-164.
https://tust.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=845&item_no=1&page_id=13&block_id=21 [2022/11/6閲覧]
- 園田希, 西山陽子, 苑田裕樹, 原田紀美枝, 大重育美, 倉岡有美子（2022）. オンラインによる4年次科目「看護の統合実習」の企画. 日本赤十字看

護学会誌, 23(1), 1-8.

https://doi.org/10.24754/jjrcsns.23.1_1 [2022/12/16閲覧]

高橋有里, 井上都之, 三浦奈都子, 鈴木美代子, 遠藤良仁, 高橋亮, 小向敦子, 三井美波, 及川陽子, 角掛奈々, 藤澤望 (2022). 新型コロナウイルス感染症拡大に伴い実施した基礎看護学実習 I の代

替学内実習の実際とその評価. 岩手県立大学看護学部紀要, 24, 61-81.

https://iwate-pu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3911&item_no=1&page_id=13&block_id=21 [2022/11/6閲覧]

Evaluation by students of comprehensive nursing practice (on-campus training) and future issues

Kei SONAI^{*}, Yuka MURATA^{*}, Kenta SHINOHARA^{*}

Abstract:

From 2020 onwards, due to the impact of the new coronavirus infection, some hospitals stopped accepting students for practical training in comprehensive nursing practice. This situation remained unchanged in 2021, therefore, as in the previous year, practical training was conducted on-campus. This research was conducted in order to identify the challenges and issues experienced in on-campus training.

On-campus training was conducted with the same training objectives as on-site training. For nursing care required for multiple subjects, multiple tasks were set for four patient roles, and four students per group practiced nursing care by taking on two patients in pairs. In addition, the role of nursing to co-ordinate and collaborate as part of a team was learnt through live-streamed online clinical lectures. Questionnaires were completed by 45 of the students who experienced the on-campus practice.

The results showed that the students generally responded positively to the multiple tasks activity and to their satisfaction with the online clinical lectures. On the other hand, some students commented that the content could not be utilized in creating their practical training records and that it was difficult to obtain a genuine feeling for night training. Based on the issues with the content of the on-campus practical training, it will be necessary to further examine the practical training methods in the future.

Keywords:

Comprehensive nursing practice, On-campus practice, Student evaluation

^{*} Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing